

箱崎 66

— 箱崎遺跡第 110 次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1459 集

2022

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI

箱崎 66

— 箱崎遺跡第 110 次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1459 集



2022
福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査を含む箱崎遺跡では博多遺跡と並んで特に中世の貿易都市として栄えていたことを示す遺構、遺物が発掘され続けています。本調査では貿易に出資する有力寺社や実際の貿易を主導する商人との間で連絡、調整を行った首崎宮やその周辺寺社の様相を明らかにしていく資料を得ることができました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで株式会社グッドライフケンパニーをはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が令和2年度に共同住宅建設に伴い、福岡市東区馬出1丁目363-1、2、3地内で実施した箱崎遺跡第110次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡 例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡を SB、竪穴住居跡を SC、土坑を SK、溝を SD、柱穴を SP、性格不明のものを SX とした。
4. 遺構番号は調査において通し番号を付していく、本書では同じ遺構略号と番号を用いている。
5. 報文中の輸入陶磁器の説明には『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、土器の説明には山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性【10】九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997、瓦の説明には『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000 の編年・分類を用いた。

本文目次

Iはじめに	1	Fig.1 箱崎遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)
1. 調査に至る経過	1	Fig.2 箱崎遺跡調査地点位置図 (1/5,000)
2. 調査の組織	1	Fig.3 箱崎遺跡北端部 (1/8,000)
II位置と環境	2	Fig.4 箱崎遺跡第110次調査地点 (1/500)
1. 地形	2	Fig.5 第110次調査と周辺調査の遺構分布図
2. 史料から	2	(1/1,000)
3. 既往の調査から	2	Fig.6 第110次調査遺構配置図 (1/100)
III調査の記録	3	Fig.7 調査区内土層図 (1/40)
1. 調査の経過と調査区	3	Fig.8 SK111・SK96 遺構図 (1/20)
2. 基本層序と遺構検出面	6	Fig.9 SK111・SK96 出土遺物実測図 (1/3)
3. 遺構と遺物	6	Fig.10 柱穴出土遺物 (1/3)
(1) 土坑墓・木棺墓	6	Fig.11 柱穴・性格不明遺構・包含層・検出面出土
(2) 柱穴出土遺物	8	遺物実測図 (1/3)
(3) 性格不明遺構・包含層・遺構検出面	Fig.12	滑石製品実測図 (1/2)
出土遺物	10	Fig.13 弥生～古墳時代遺物実測図 (1/3)
(4) 高麗無釉陶器・瓦・滑石製品	11	Fig.14 箱崎遺跡出土瓦一覧 (1/8)
IVまとめ	14	Fig.15 箱崎遺跡出土瓦分布図 (1/10,000)
1. 遺構とその時期	14	
2. 箱崎遺跡出土の瓦	14	

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市東区馬出1丁目363-1、2、3地内における共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の有無について株式会社グッドライフカンパニーから提出された照会を令和元年12月18日付で受理した。これを受け、文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に位置していることから遺跡確認のために確認調査を必要とする旨の回答を行った。確認調査は令和2年1月22日に実施し、地表面下120cmで遺構が確認されたことから遺構の保全等に関して関係部局と協議を行うことになった。その結果、埋蔵文化財への影響が工事区域の全域において回避できないことから、令和2年8月11日より調査を開始し、同年9月17日に終了した。

2. 調査の組織

令和2年度の発掘調査、令和3年度の資料整理、報告書作成を以下の組織体制で行った。

【調査委託】 株式会社 グッドライフカンパニー

【調査主体】 福岡市教育委員会

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部活用部埋蔵文化財課

課長 菅波 正人（令和2、3年度）

調査第2係長 藏富士 寛（令和2、3年度）

【庶務】 文化財活用課管理調整係 松原 加奈枝（令和2年度）

内藤 愛（令和3年度）

【事前審査】 埋蔵文化財課事前審査係

係長 本田 浩二郎（令和2年度）

田上 勇一郎（令和3年度）

主任文化財主事 田上 勇一郎（令和2年度）

森本 幹彦（令和3年度）

文化財主事 山本 晃平（令和2、3年度）

朝岡 俊也（確認調査 令和元年度）

調査基本情報一覧

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	110次	調査路号	HKZ-110
調査番号	2024	分布地図番号	035	遺跡番号	2639
申請面積	222.83 m ²	調査対象面積	115.51 m ²	調査面積	99 m ²
調査期間	令和2年8月11日～9月17日			事前審査番号	2019-2-1004
調査地	福岡市東区馬出1丁目363-1、2、3				

II 位置と環境

1. 地形

博多湾に沿って砂丘列が形成され、その砂丘の高まりに遺跡が分布する。Fig.1で図示した箱崎遺跡(1)、博多遺跡群(2)、堅粕遺跡(4)、吉塚本遺跡(5)、吉塚祝町遺跡(6)、吉塚本町遺跡(7)が砂丘列に立地した遺跡である。当時の海岸線は元寇防壁ライン、地質調査や遺跡の分布等から推定され、砂丘列の背後にはラグーンが形成されている。

箱崎遺跡は概ね現在の街路に沿って南北約2.2km、東西は最大0.6kmに及ぶ砂丘列に立地した遺跡である。最高所は菅崎宮付近に位置している。砂丘列の背後には宇美川が蛇行して流下し、河口で多々良川と合流している。

近年、箱崎遺跡の北端(Fig.3)に位置する九州大学箱崎キャンパスの調査によって、周辺の状況が明らかになりつつある。その分析によるとAD1000年頃までは生活できる環境ではなく、AD1060年以降AD1281年以前に堆積が急速に進み、砂州が拡大したとみられている。(註1)

2. 史料から

本調査に関連した10世紀から12世紀代にかけての史料を略述する。箱崎遺跡の発展の契機となつた菅崎宮は「菅崎宮縁起」によれば延長元年(923)に德波郡大分宮から遷座したという。また、延長五年に完成した「延喜式」に「八幡大菩薩菅崎宮」の記載があることからこの時期までには創建されていたとみられる。遷座した理由としては新羅入寇の危機感と大宰府官人の日中貿易への私的な関心によるところが大きいといわれる。大陸に対して最先端に位置した博多湾沿岸に鴻臚館(3)、博多(2)、香椎宮(14)とならび防衛と貿易の拠点を配置させるというものである。創建理由の後者については、菅崎宮大宮司を大宰府官の奏氏が兼ね、大宰府と菅崎宮が密接に結びついていたことと関連している。12世紀代になると菅崎宮をはじめとする有力寺社に帰属した博多綱首が日宋貿易に活躍するようになる。菅崎宮は永承六年(1051)年に石清水八幡宮の別宮に、文治元年(1185)に石清水八幡宮に返付され、その支配を受ける。

3. 既往の調査から

菅崎宮創建時の10世紀前半から大宰府の貿易管理が継続しているとみられる11世紀前半までの遺構・遺物は概ね菅崎宮の南東部に集中している。本調査区の東側40次(19区)からはイスラム陶器、46次(21区)からは綠釉陶器、40次(7区)からは石帶巡方や越州窯系青磁が出土し、官衙的施設や官人居住区の可能性が考えられている。鴻臚館廃絶後の11世紀後半以後は権門勢家による貿易が増し、12世紀代になると、前項のように寺社と結びついた博多綱首の活動が活発となる。菅崎宮の南東部には「IVまとめ」で記載したように当該期の瓦出土地点が集中している。また、28次調査地点の南側は字名「寺中」と呼ばれ、「筑前國統風土記」妙徳寺の項に「馬出村の南に寺中町といひ伝えたる横道あり。是菟西妙徳寺にありし時、宋より来りし從者の居たりし所といふ。」と記されている。

13世紀代には菅崎宮領であった堅粕(4)には馬頭觀音像や耕月院、明光寺の石塔がこの時期に中国(南宋)渡来と考察されている。(註2)また、近接した東光院境内では12世紀代の中国系瓦が出土している。このように12~13世紀代には菅崎宮所領内に博多綱首の拠点が展開していたものとみられる。

註

1. 2019 「箱崎遺跡-HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点」九州大学理藏文化財調査室報告 第2集 p128・134
2. 2020 井形 進「九州の中国渡来の石造物—福岡平野を中心に—」『九州の中世IV 神仏と祈りの情景』 高志書院

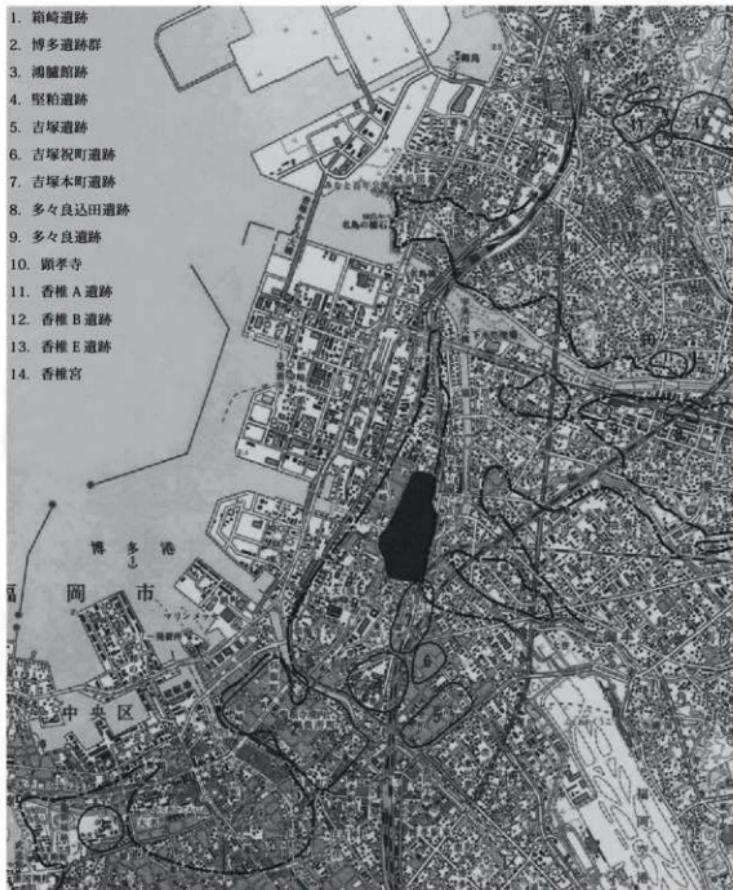
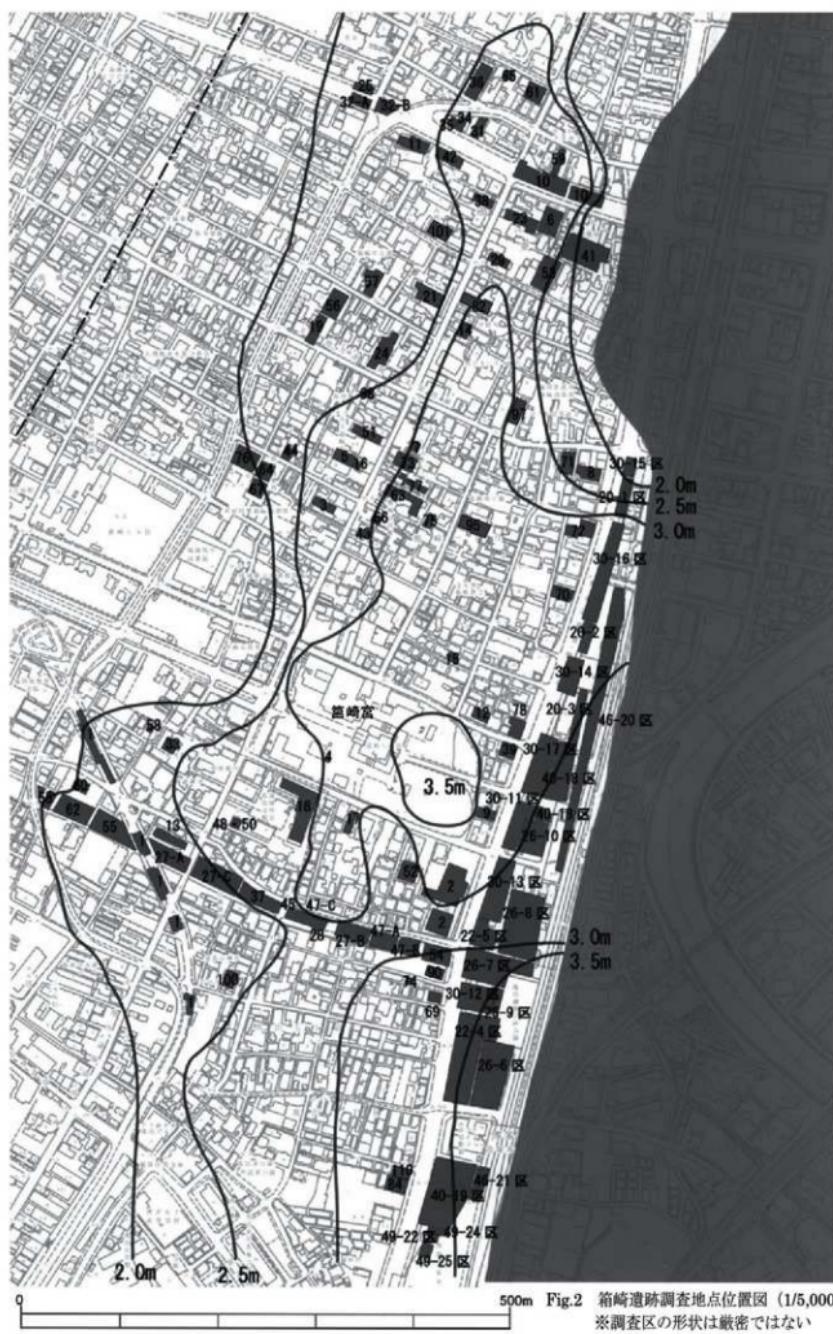


Fig.1 箱崎遺跡と周辺遺跡分布図（1/50,000）（中尾 2017 を引用。図上一点鎖線は推定旧海岸線）

III 調査の記録

1. 調査の経過と調査区

事前協議により調査前に基礎杭打ちと土留めの H 鋼・矢板圍いが工事施工業者によって行われた。表土鋤取りは調査担当者立ち合いのもと、表土下約 1.0m までの近、現代の客土を施工業者によって



500m Fig.2 箱崎遺跡調査地点位置図 (1/5,000)
※調査区の形状は厳密ではない

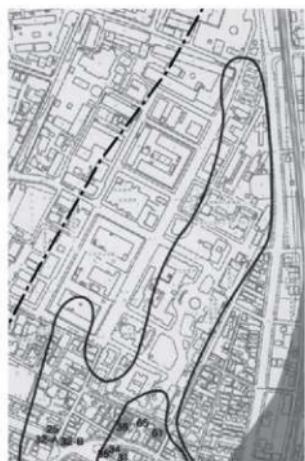


Fig.3 箱崎遺跡北端部 (1/8,000)

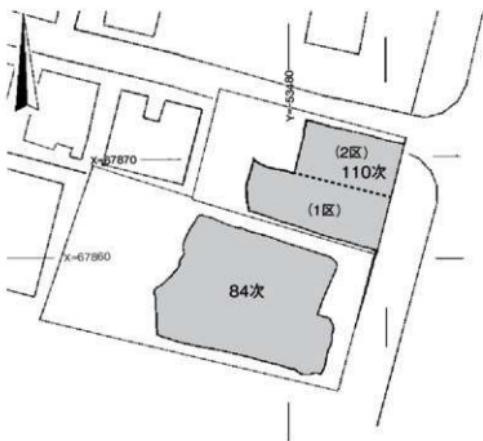


Fig.4 箱崎遺跡第110次調査地点 (1/500)

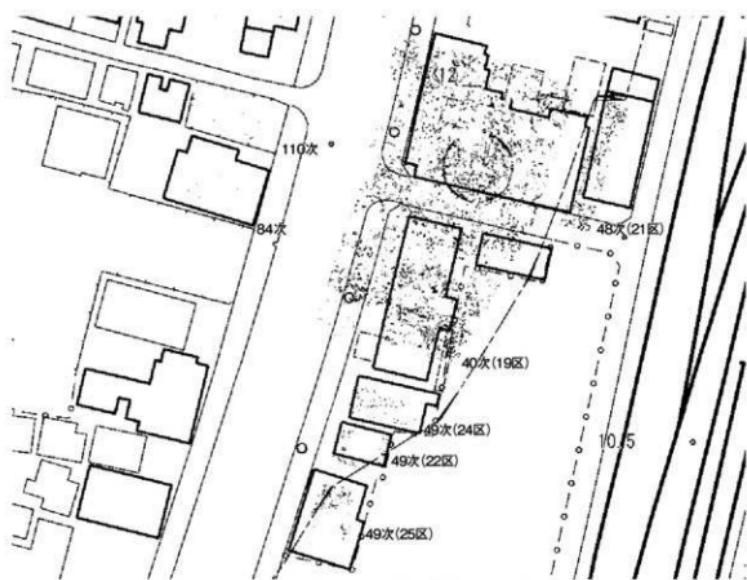


Fig.5 第110次調査と周辺調査の遺構分布図 (1/1,000)

剥ぎ取り・撤出して行った。但し、北東の重機、トラックの乗り込み口は歩道面と同じレベルまで矢板の上端を押し下げるために重機により地山面を深く掘削したことによって調査ができず、遺構の記録ができなかった。

調査は南側 (Fig.4 1区) から開始し、北西部の2区に移った。廃土処理のため、1区と2区は別々に調査・記録することになった。また、上記の調査できなかった入口部分は廃土置き場とした。

2. 基本層序と遺構検出面 (Fig.7 Ph.4)

試掘では標高 4.8m の表土下、約 1.0 m までは近、現代の客土が堆積するとみられていたが。表土鋤取り時に、80cm 程度掘り下げたレベルで中世の包含層である黒色砂質土 (A-A' 1層) が認められたことから、鋤取りはこのレベルまでとした。この整地層は全域に堆積し、遺物も多く含む。黒褐色砂層ないし、暗灰褐色を呈した砂質土でトラシマ状のラミナがみられ、厚さ 10 ~ 15cm 堆積する。調査ではこの黒色砂層上面では遺構検出は行わず、人力により掘り下げた。

この黒色砂層の下層には黒色砂質土から明黄褐色砂 (A-A' 3層) への漸移層 (2層) が検出された。この2層から3層上部までは1層同様にトラシマ状のラミナがみられる。遺構検出は3層の明黄褐色砂層上面で行った。3層は標高 3.6 ~ 3.8 m を測り、南西側へ下降している。さらに下層になると遺物を含まない粒子が粗い水性砂 (A-A' 4層) となり、標高は 3.2 ~ 3.7 m を測る。

3. 遺構と遺物

(1) 木棺墓

SK96 (Fig.8 Ph.5, 6)

調査区南側中央で検出された。主軸方位 N·86° ·E をとる。副葬品の位置から頭位は東向きとみられる。主軸長 174cm、隅角が方形になった西端で幅 63cm を測る。底面は中央部が深い断面舟底状を呈し、上面から最深部で 66cm、下端付近で 52cm を測る。東端には北側壁際に短刀、南側壁際に完形の土師器碗 1 個体が副葬されていた。いずれも、底面下端近くのレベルから出土した。短刀の切先は東端に向け、ほぼ水平に置かれている。埋土中から釘が出土したことから木棺墓と考えられる。下底には厚さ 10cm 以上の黒色有機土が堆積していた。

出土遺物 (Fig.9)

9 の土師器碗は一部欠損するが、割れ方から取り上げ時によるものと思われる。口径 15.6cm、器高 6.4cm を測る。高台は径 6.3cm、高さ 0.8cm を測る。外面体部中位ないし、やや下位に弱い屈曲がみられ、押し出しによる指頭痕にナデやヘラナデが施されている。上位はヨコナデ後に水平ないしやや斜位の粗いミガキが施される。内面にはコテアテ痕と交差した粗いミガキが見られる。淡い黄灰色を呈すが、硬質な焼成である。大宰府編年の X II B ~ X III 期 (12世紀前半代) とみられる。

鉄器 1、2 は上層から出土した。1 は楔か釘、2 は刀子とみられる。刃部の先端を欠損している。3 は全長 27.5cm の短刀である。木質は無く、刀身のみである。両闇で刃部長 19.4cm。最大幅 3.1cm 茎長 8.1cm を測る。

SK111 (Fig.8 Ph.7)

調査区北端で検出された。主軸方位を N·20° ·W にとり、南北に近い向きである。北端は基礎杭で破壊されている。主軸長は 181cm 以上、幅 56cm を測る。深さ 37cm を測り、断面は台形を呈す。東西の側壁および、南辺の壁面は傾斜し、底面の幅は 20cm となる。傾斜した南壁床面より浮いた状態で逆位の完形土師皿 (1) 1 個体が出土した。他の 1 ~ 8 は破片であることから頭位は南向きか。

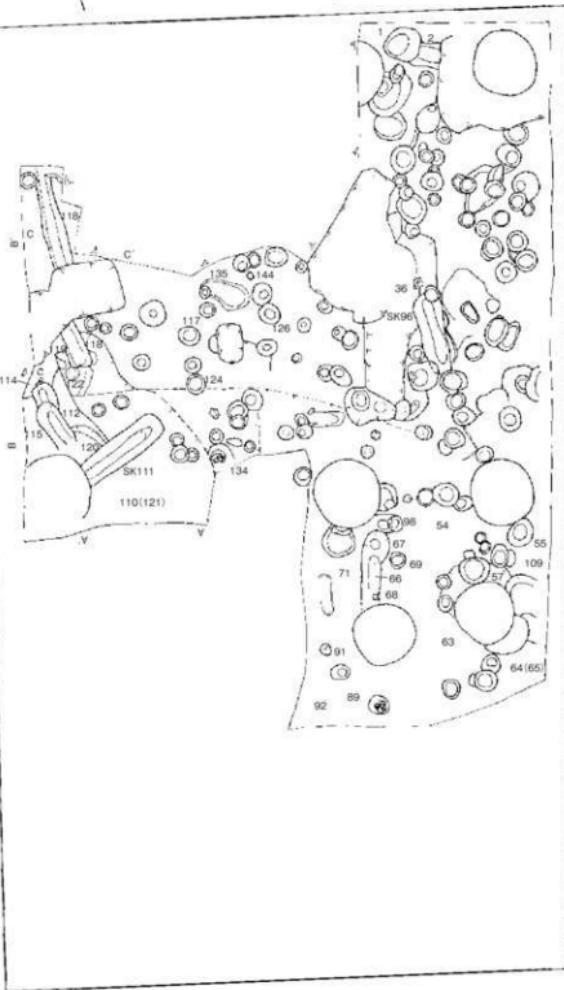


Fig.6 第 110 次調査構造配置図 (1/100)

X=678810

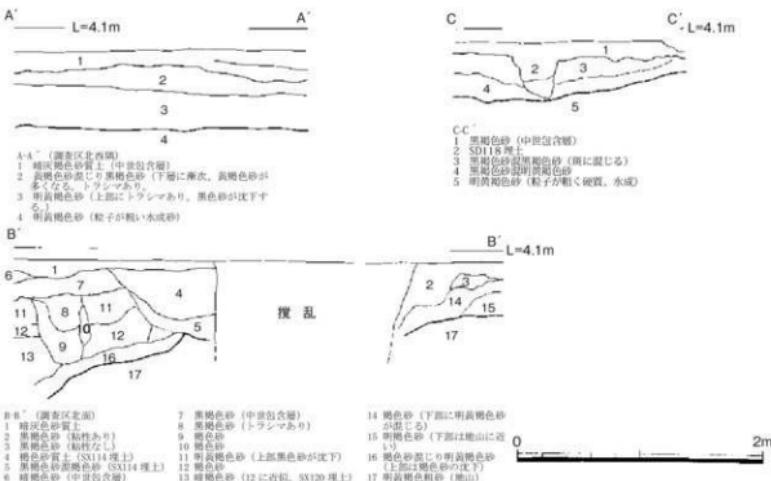


Fig.7 調査区内土層図 (1/40)

出土遺物 (Fig.9)

1は完形の土師皿である。口径 10.6cm、器高 1.4cm を測る。体部上位が外弯する。外底にヘラ切り痕と板目が残る。火熱を受け赤変している。2は復元口径 14.2 ~ 15.0cm の土師器壺である。口縁端部が外反し、外底はヘラ切りの丸底である。3は土師器碗である。明黄灰色を呈す。外面体部上位はヨコナデ、下位に押し出しの指頭痕が残る。内面にはコテアテの短い擦痕と工具による長い擦痕がみられる。内面は平滑に調整され、ミガキの痕跡が不明瞭となる。4は土師器碗である。口縁部が肥厚し、外反する。外面上位はヨコナデ、下位には指頭痕が残る。内面は底部から体部下位にかけて同方向の細かいミガキが施され、体部下位では斜位に施されたミガキと交差する。体部上位はコテアテがみられ、横位に近いミガキである。体部から口縁部にかけて弯曲した部分の器面が工具のアテで剥落した部分がみられる。5は黒色土器Aの椀である。復元口径 15.0cm を測り、口縁端部は外反する。外面はクロロ回転を利用した横位のミガキ、内面には横位の細かいミガキに斜位の螺旋状に回したミガキが交錯する。6は白磁碗である。直口に近いが、口縁端部が内側へわずかに折れ、細くなる。器厚は 3.4mm と薄く、淡黄灰色を呈す。7は白磁碗である。器厚が 3.2mm と薄く、体部は直線的に延び扁平な玉縁口縁がつく。外面下位は露胎、内面は釉が溶融し、粘土が接着している。見込みに沈線状の段を有す。釉色はわずかに線がかった灰色を呈す。8の平瓦片は凹面の端部は面取り、凸面には斜格子のタタキを有す。

出土遺物は X I 期 (11世紀前半～末) に収まとるとみられる。

(2) 柱穴出土遺物

SP06 調査区北東角で検出された。10の土師皿は口径 9.0cm を測る。糸切りと思われる底部はわずかに上げ底である。11はIV類の白磁碗である。12世紀中頃～後半か。

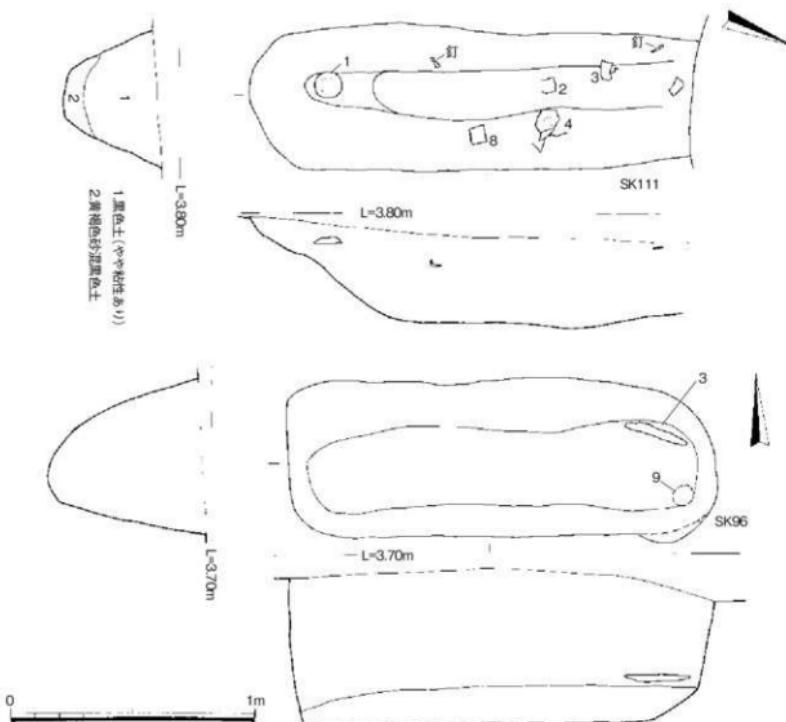


Fig.8 SK111・SK96 遺構図 (1/20)

SP98 調査区南西部で検出された。柱穴上面から完形の瓦質小皿12が出土した。12は口径10.1cm、器高2.2cmを測る。体部中位で屈曲し上半は外反していく。下半は押し出されたヘラ切りの丸底である。外面体部から底部にかけて細かいミガキを施す。内面体部には短いコテアテ痕と斜位の長い擦痕がみられ、その後に底部から体部下位にかけて細かい同方向のミガキが施されている。XⅠ期（11世紀前半～11世紀末）か。

SP124 13は楕円型瓦器碗である。約2/3が遺存する。外面口縁端部付近が幅広く回み、内面の口縁端部には1条の沈線が巡る。径6.2cmの低平な高台を貼り付ける。全面に細かい密なミガキが施されている。外面は横位から斜位のミガキが山形に交錯し、外底部にも同方向の密なミガキがみられる。内面は底部に同方向のミガキ、体部下位に斜位から横方向のミガキ、上位はロクロ回転を利用したと思われる横位のミガキが施されている。内外面黒色を呈す。12世紀前半～中頃くらいか。

SP126 14の土師皿はほぼ完形で口径10.6cmを測る。体部上位に屈曲がみられ、ヘラ切りの底部は平底である。15の土師皿は口径11.0cmを測る。体部は外弯ぎみに延長し、外底はヘラ切りで板

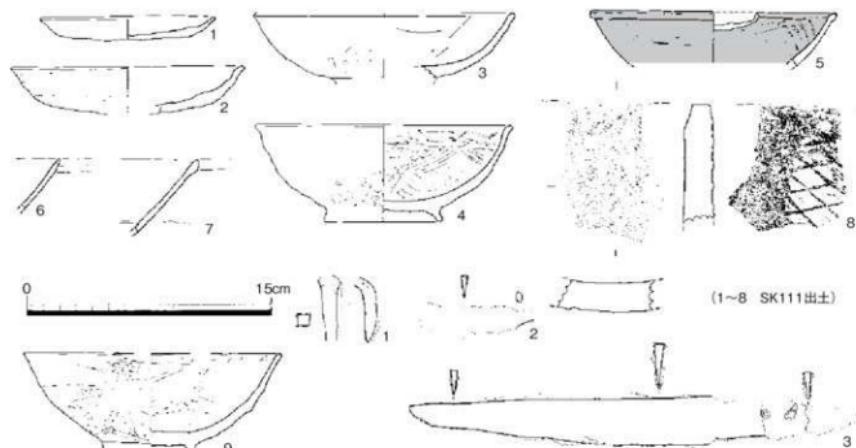


Fig.9 SK111・SK96 出土遺物実測図 (1/3)

(9. 鉄器1~3 SK96出土)

目はみられない。16の土師器椀は口径 15.0cm、器高 5.9cm 高台径 8.7cm を測る。体部中位で緩く屈曲し、口縁端部は外寄する。内外面ヨコナデ調整を施す。X～X I期（10世紀末～11世紀末）に収まるとみられる。

SP134 (Ph.8) 17の白磁碗は完形に近い。V・4aに類す。18は東播系の捏鉢である。12世紀後半代とみられる。19の瓦当は界線で区画した中区に半裁花菱文を配す。レンガ色を呈し、硬質である。

(3) 性格不明遺構・包含層・検出面出土遺物

SK36 調査区南側中央で検出された。試掘トレンチに切られ、SK96と切り合う。深さ 32cm を測り、一部に 20～22 を含む土器が集中した箇所がみられた。20の土師皿は復元口径 10.5cm を測る。ヘラ切りの外底はわずかに丸みをもつ。21の土師器椀は体部はわずかに弯曲し、底部との境に屈曲をもつ。口縁端部は直に延び丸く收める。内外面体部はヨコナデ調整で、ミガキはみられない。22の土師器椀は 21 とほぼ同形である。外面体部下位のみに横位の細かいミガキ、内面体部は疎らに横位の細かいミガキが施されている。内底は器面が剥落し不明。X期（10世紀末～11世紀前半）前後か。

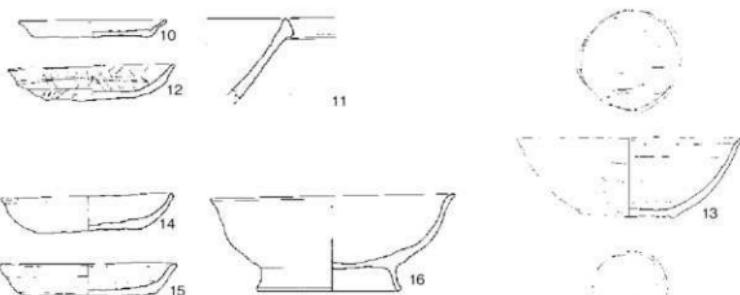
SX68 構状の遺構 SD66 の延長方向で土師皿のほぼ完形 23 が出土した。土師皿 23 は口径 9.5cm、器高 1.4cm を測る完形に近い土師皿である。外底はヘラ切りの丸底である。

検出面 24 は復元口径 10.0cm の土師皿である。体部が大きく開き、器高は 0.9cm である。ヘラ切りの外底はわずかに上げ底である。X I期（11世紀前半～11世紀末）くらいか。

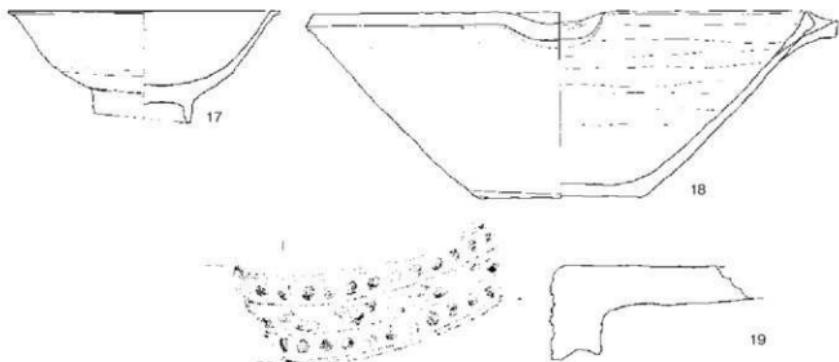
SX110 調査区北西隅で検出された明黄褐色砂の落ち込みである。井戸の可能性がある。土師器椀 25 は体部がわずかに内寄し、内底中央が凹む。IX期（10世紀後半）か。

包含層 144 26の土師器碗は口径 12.8cm、器高 3.9cm を測る完形である。体部中位に屈曲を有し、上半部は内寄する。口縁端部はわずかに外反する。内外面ヨコナデ、外底部ヘラ切り後ナデ調整を施す。X～X I期（10世紀末～11世紀末）くらいか。

検出面 27 は内黒の黒色土器 B類碗である。外面火熱を受けて赤変し、煤が付着している。内面口縁部付近はヨコナデ、下位は斜位のミガキが施されている。X期（10世紀末～11世紀前半）か。



(10,11はSP06,12はSP98,13はSP124,14~16はSP126出土)



(17~19はSP134出土)

Fig.10 柱穴出土遺物 (1/3)

包含層 28は低平な玉縁口縁の青白磁碗である 29はV-4c類の白磁碗である。30はV-2a類に近い白磁碗である。

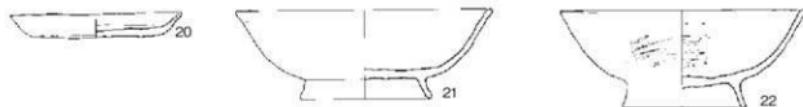
(4) 高麗無釉陶器・瓦・滑石製品

高麗無釉陶器 (Fig.10)

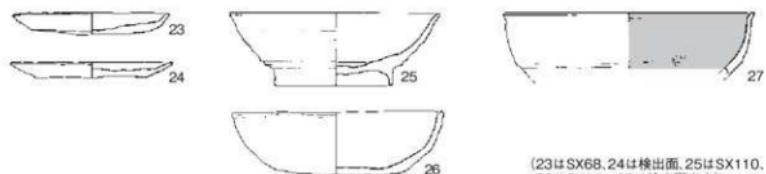
31は調査区中央部に位置するSP117から出土した。突帯を有し、外面は細かい格子目タタキ、内面は同心円文の當て具の後、平行文の當て具痕が重なる。32は調査区南西隅の砂丘砂が落ちていぐ明黄褐色砂の包含層から出土した。器厚が薄く、外面は細かい格子目タタキ後ナデ、内面は疑格子のアテグ痕の後、沈線状のヨコナデが施されている。

瓦 (Fig.10)

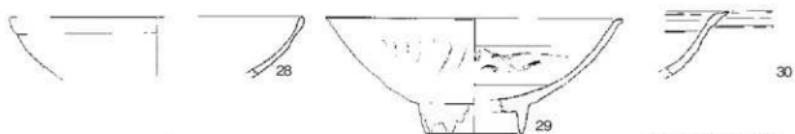
33は調査区南西部で検出した平瓦片である。凸面に斜格子文のタタキ、凹面には布目が残り、狭端面付近には模骨痕とナデがみられる。側縁は凹面側の半分はヘラ切り、凸面側は折れたまま、未調



(20~22はSK36出土)



(23はSX68, 24は検出面, 25はSX110,
26はSX144, 27は検出面出土)



(28~30は包含層出土)



(31はSP117, 32は包含層出土)



(33は検出面, 34はSX121出土)



Fig.11 柱穴・性格不明遺構・包含層・検出面出土遺物実測図 (1/3)

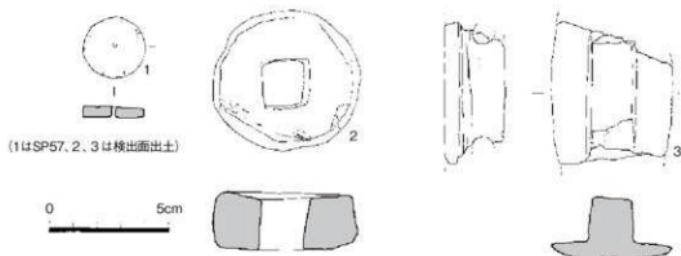


Fig.12 滑石製品実測図 (1/2)

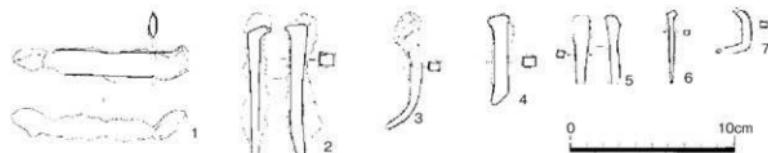


Fig.13 鉄器実測図 (1/3)

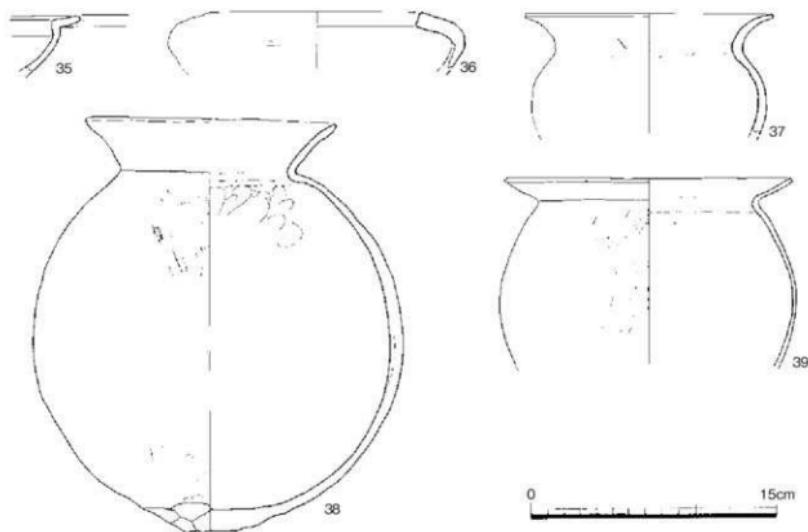


Fig.14 弥生～古墳時代遺物実測図 (1/3)

整である。34は北西部のSX121(SE110)から出土した平瓦片である。外面に斜格子文のタタキ痕、内面に布目と継じ紐状の圧痕がみられる。

滑石製品 (Fig.11)

1は径2.5cm、厚さ4mm、孔径1.5mmの有孔円盤である。石材は滑石と思われる。2は検出面上層の黒色包含層から出土した。径6.0cm、厚さ2.4cmを測る円盤の中央に辺長2.0cmの正方形の孔を穿つ。石鍋の転用で弯曲がみられ、凸面にススが付着している。3は石鍋を再利用したコテ状の工具と思われる。穿孔を有した縦型取手部分は煤が付着したまま取手とし、押圧するヘラ部分は薄い舟形に研磨し成形している。

(5) 柱穴・検出面出土鉄器 (Fig.13)

1,4,6は西側に地山が落ちていく検出面、3,5,7は柱穴、2は南西部の溝状遺構SX66から出土した。1はヤリガンナと思われる。両端が捩じれた形状となり、折れた部分の断面形状は側縁が刃部状の紡錘形となっている。2～6は鉄釘である。7は鍔状に折れ曲る。

(6) 弥生～古墳時代遺物

35は検出面から出土した弥生後期初頭の高杯である。胎土はきめ細かく、丹塗り土器と思われる。36は北西隅の下降した砂丘砂から出土した弥生中期の袋状口縁である。37は南西隅のSP69から出土した古墳初頭の甕である。内面頸部下にヘラケズが施されている。38は南西隅の検出面や柱穴から出土した弥生終末期の甕である。小さく突出した底部をヘラナデ状に成形している。外面のタテハケは上下6～7段、概ね右回りに施されている。胴部の最大径部付近に粘土を貼り付けて肥厚させている。39は北端のSX120から出土した。体部上位にヨコハケを施した古墳初頭布留期の甕である。

IV まとめ

1. 遺構とその時期

(1) 弥生中期から古墳初頭

この時期の明確な遺構は検出することができなかつたが、地山が西側に落ちていく北西部の明黄褐色砂層 (Fig.6 A-A' 3層) 中から多く出土した。弥生終末から古墳初頭の時期の遺物は東側に近接した40次調査では方形周溝墓が検出されているので、その広がりに関連したものと思われる。南側の84次でも庄内系や山陰系の壺を含む古墳初頭の遺物が出土している。

(2) 中世

宮崎宮創建時期に近い10世紀前半まで遡る明確な遺物は確認できなかつたが、10世紀末から12世紀代を中心とした遺構、遺物が検出された。11世紀から12世紀前半までの時期に木棺墓SK96とSK111が含まれる。12世紀代では中頃くらいの畿内産(楠葉型)の瓦器碗や後半には廃棄された半裁花菱文の軒平瓦が出土した。84次でも畿内産瓦器碗や半裁花菱文とみられる瓦片のほか鉄製匙や薩摩塔が出土し、寺社関連遺物として注目される。楠葉型瓦器碗の出土は宮崎宮が永承六年(1051)年に石清水八幡宮の別宮に、文治元年(1185)に石清水八幡宮に返付された事との関連が考えられている。

2. 箱崎遺跡出土の瓦 (Fig.15, 16)

分布 既往調査の瓦出土量は少なく、1調査区から多くて数点の瓦当片が出土する程度である。瓦の分布は全時期を通じて箱崎宮の南側に集中している。(註1) I期は宮崎宮南東部に集中しているが、

北東の 70 次周辺にも分布がみられる。II 期になると南側の 26 次 6 区や 84 次、110 次に瓦 4 や 28 のタイプが出土し、さらに 84 次からは薩摩塔も出土していることから寺域の広がりが推測される。II 期の中国系の瓦は当該期の他型式の分布とほぼ重なるが、北西の 5 次や南西の 27 次 A 区でも出土している。III 期（註 2）では周縁部である 61 次、67 次、55 次にも展開がみられ、遺構が時期を追つて周縁に広がっていく様相と重なる。（註 2）

時期	年代	瓦番号	型式等（註 3）
I 期	10 ~ 11 世紀	1 ~ 4, 23 ~ 27	蓮弁軒丸、偏向唐草文など
II A 期	11 ~ 13 世紀	5, 13 ~ 15, 28, 29	半裁花菱文軒平、連巴劍頭文軒平瓦
II B 期	11 ~ 13 世紀	6 ~ 9, 31 ~ 35	中国系瓦
III 期	14 世紀 ~ 16 世紀	10, 15 ~ 17, 30, 36 ~ 45	蓮華唐草文、宝朱唐草文など
IV 期	17 世紀 ~	18 ~ 22, 46, 47	（註 4）

Tab.1 瓦時期別分類表

註

註 1 「II 位置と環境」の項で記した字名が「寺中」、「御所ノ内」とその周辺とみられる。妙見通りの東側の区画整理地の字名は異なる。

註 2 2013 佐藤一郎「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて—『特別展 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市
2018 中尾祐太「考古学からみた箱崎」『アジアのなかの博多湾と箱崎』九州史学研究会

註 3 大宰府史跡瓦分類から 3 は 217 型式、4 は 132 型式、5 は 048 型式、23 は 666A 形式、25 は 576 型式、26 は 515 型式に該当する。

註 4 22 は名護屋城、名島城出土瓦と同文で L11e に分類されるので 16 世紀末まで遡る可能性がある。



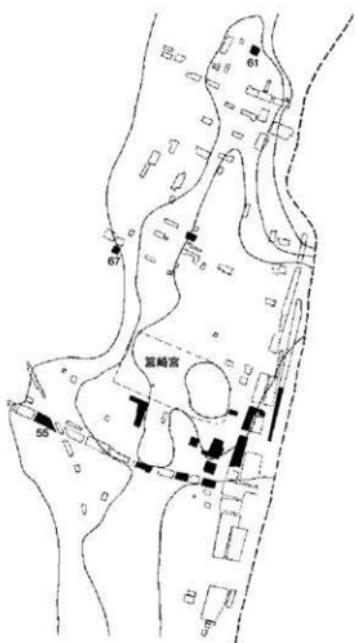
Fig.15 箱崎遺跡出土瓦一覽 (1/8)



I ~ II A期



II B期



III期

Fig.16 箱崎遺跡出土瓦分布図 (1/10,000)

瓦番号	次数	同文出土地点	瓦番号	次数	同文出土地点
1	26-8	18	23	47-B	2 26-8 30-13 45 47-A 54 69 70
2	70	30-16B	24	70	
3	39	26-8 30-13 47-B 47-C 54 70 72	25	2	
4	47-B	26-6 54	26	69	
5	9	2 26-8 30-13	27	47-B	
6	2	54 30-11	28	2	9 30-13 69 110
7	30-13	18	29	47-C	54
8	2	9 69 18 54 27-A 70	30	18	
9	69		31	12	
10	9	40-18e 46-20c 52	32	2	5 26-8 47-C 54 72
11	18		33	2	
12	61		34	9	30-13 27-B 45
13	30-13		35	17	
14	46-20c	52 59	36	18	47-A 52
15	54	47-C	37	2	
16	61		38		30-13
17	46-20c	67	39	55	
18	2		40	47-C	
19	2		41	18	
20	2		42	18	
21	2		43	9	
22	18		44	73	
			45	30-11	
			46	2	
			47	27-B	

Tab.2 瓦出土土地表 (出土地点は Fig.2 参照)



Ph.1 I 区全景（西から）



Ph.2 II 区 1面全景（西から）



Ph.3 II 区 2面全景（西から）



Ph.4 調査区南西部 92 付近土層（東から）



Ph.5 SK96 完掘（西から）



Ph.6 SK96 短刀出土状況（南から）



Ph.7 SK111 土層と遺物出土状況（南から）



Ph.8 SP134 遺物出土状況

報告書抄録

箱崎 66

—箱崎遺跡第110次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1459集

2022年3月24日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印 刷 株式会社パックスメディア
福岡市南区玉川町18番6号
BND高宮パックスメディアビル

